

憧れの日本で 自らの人生をつくる

芥川賞作家 楊逸 (やんいー)

NHKラジオ
明日への言葉
2012年9月5日

楊逸(やんいー、本名:劉 菝(りゅう・ちよう、「ちよう」は草冠に「攸」)、1964年6月18日-)は日本の小説家である。中国ハルビン市出身。2008年、「時が滲む朝」で第139回芥川賞受賞。中国籍の作家として、また日本語以外の言語を母語とする作家として史上初めての受賞となった。2011年、日本に帰化。

父はハルビンの大学で漢文を教えていたが、1970年1月に文化大革命で蘭西県の農村に下放され、1973年9月にハルビンに戻る。中学生の頃、日本にいる親戚が送ってきた日本の都会の風景写真を見て日本に憧れる。ハルビンの大学に進学し、会計学を専攻するが、将来に不安を感じて卒業の半年前に中退。

1987年、留学生として来日。この時点では日本語が全く分からなかったため、パソコンの外枠の組み立て工場や、中華料理店での皿洗いなどの仕事をして授業料を稼ぎ日本語学校

に通った。歌手の松田聖子が歌うカセットテープをゴミ捨て場から拾って、それを日本語の聞き取りの勉強に使ったりもした。お茶の水女子大学文教育学部地理学専攻卒業後、繊維関係の会社や在日中国人向けの新聞社勤務を経て2000年に中国語教師となる。この間、1991年に結婚して2児をもうけるが、2001年に離婚。



2005年頃から反日デモの影響で仕事が減ったため、小説を書き始める。2007年、「ワンちゃん」で第105回文学界新人賞を受賞し小説家としてデビュー。2008年、「ワンちゃん」で第138回芥川賞候補。同年、「時が滲む朝」で第139回芥川賞受賞。2009年より関東学院大学客員教授、2012年より日本大学芸術学部文芸学科の非常勤講師に就任。



昭和62年、22歳の時に日本にきて25年。

日本語学校、アルバイト、中国語新聞の記者、語学教師などをへて小説を書き始める。

2008年、芥川賞を受賞。いまは引きこもって気がむいたら書いている。思いがまとまらないと書けない。現在は作家、大学でも教えている。あつという間の25年だった。

1964年、中国のハルビンで生まれた。ちょうど東京オリンピックの年。日本では高度経済成長が始まる時。当時、日本と中国は別世界だった。中国は文化大革命の真っ最中。父は大学教授、母は教師。知識階級だったが文化大革命で農村に下放された。1973年、小学校の2年生の時にハルビンに戻った。日本に来るまで、平和な穏やかな日々はなかった。

母の家系は国民党系で台湾ににげ、叔父が日本に渡ったの情報を得て、期待が持てる展開になった。日本からカラーの写真が送られてきて驚いた。日本ではいい生活をしている！ これ同じ世界？・・と驚いた。これほどのショックはなかった。当時、中国にはカラー写真はなかった。

叔父が横浜にいたので日本に留学したい。しかし自分の家は教師一家、コネがない。中国はコネ社会。ダメもとで日本大使館に書類をだしたら、OK 驚いた。日本はコネが必要ない社会だとわかった。中国風にくといつダメといわれるか判らないので、急いで日本に向った。

日本に来て感じたことは、空気が穏やかで、しっとりしていることだった。

従兄弟の住む秦野に行く時、夜、小田急線に乗った。電車の中で良い匂い(シャンプー？ 香水？)がしたのが強く記憶に残っている。

当時、中国は革命中で香りのするようなものはなかった。

昼間は日本語学校、夜5時から翌朝8時まで仕事。寝る時間もなく、日本語学校でねていた。あの頃、人生で一番充実していた。好奇心一杯で、すべて新鮮だった。

東海大学前に住んでいたが、駅からアパートまで歩いて30分、途中、ゴミ置き場に家具・電気製品のいいものが捨ててあった。当時、中国にない冷蔵庫が捨てられていて驚いた。

来日4年目に、御茶ノ水女子大に受験、入学、就職。書くのが好きで中国語の新聞記者をしていて、仕事は楽しかった。5ページを担当していた。書くのが早いので、自分の文章のせていた。当時は定時にきて定時に帰っていた。そのうち6ページを担当したが、収入が少なく、そこを辞めた。

退職後、中国籍の女性で子供二人持ちの転職は難しかった。書くのは楽に出来るので、フリーライターになれたらと思えば日本語の小説を書き始めた。シングルマザーで大変だった。

はじめて日本語で書いた小説「ワンちゃん」で文学界の新人賞を受賞。助かった！人生最大の転機だった。その次の作品「時が滲む朝」で芥川賞。自分でもびっくりした！

自分は天安門事件に参加した学生と同世代。皆、いい目にあっていない。国に良くなって欲しいの愛国心を持っている。

2011年に日本に帰化。今後、書くのを楽しむ感覚で仕事をしたい。個性的でありながら普遍性のある小説を目指す。

日本に来た時の思い出の曲は井上陽水の「少年時代」。この曲を聴くと、自分の中国での子供時代を思い出す……